

契約結婚のはずなのに、
殿下の甘い誘惑に
勝てません!

綾瀬ありる

ARIRU AYASE



ノーチェ文庫

登場人物紹介



クレア・エイベル
公爵令嬢。
エグバートの婚約者候補筆頭を
自負していた。



ブリジット
アンジェリカの部屋付きの侍女。
有能だが、恋愛面では少し夢見がち。



ディヴィット・ヴァーノン
アンジェリカの次兄。
近衛隊に所属しており
エグバートと親しい。



エドムント・フォン・
アーレンス

テオバルトが重用する
シルト帝国の子爵。
エグバートとは旧知の仲。



アレクサン德拉
シルト帝国の皇族。
エグバートとは旧知の仲。



テオバルト
ロイシュタ王国の隣、
シルト帝国の次期皇帝。
エグバートの親友で
アレクサン德拉の兄。



アンジェリカ・ヴァーノン
中堅貴族にあたる伯爵家の令嬢。

突然エグバートに求婚される。
思っていることが顔に出やすい。



エグバート・ロイシュタ

ロイシュタ王国の王太子。
基本的に穏和だが、恋愛面で難攻不落なため、
「氷の王子」と令嬢たちに噂されていた。

目次

契約結婚のはずなのに、
殿下の甘い誘惑に勝てません！

初の外遊先なのに、
どうやら歓迎されていないみたいですね！

ご契約は慎重に

番外編

書き下ろし番外編

王太子殿下は

かわいい妻の誘惑を待ちきれません

契約結婚のはずなのに、
殿下の甘い誘惑に勝てません！

第一話 契約結婚のススメ

「——さあ、行きましょうか、僕のかわいいアンジェリカ」

優しい微笑みを浮かべた青年が、その言葉と共に、白い手袋に包まれた手を差し伸べてくる。淡い金髪に翠玉の瞳をした甘い顔立ちを、濃紺の正装がきりりと引き締めていて、惚れ惚れする貴公子ぶりだ。

相対するアンジェリカのドレスもまた、同じ色をしている。足元へ向かうにつれて徐々に紫に変化するグラデーションと、星をちりばめたような銀の刺繡が美しい。初めて見た時には、あまりの美しさにため息が漏れた。仕立ての良いそのドレスは、肌触りも着心地もとつても良くて、着せられている最中もうつとりしたものだ。

流行の形をしたそれは、胸元がかなり開いている。アンジェリカの胸は大きくもないが小さくもない、中途半端なサイズだが、今日はコルセットで寄せて上げてもらい、普段よりも深い谷間が作られていた。その上で煌めく首飾りには、深い色をした大きな翠

玉がはめ込まれている。

何から何まで目の前の青年が用意してくれたものだが、一体どれほどの値がつくものなのか、考えるのも恐ろしい。

少し癖のあるアンジェリカの赤い髪は、今日は複雑な形に結い上げられている。流行に従つて遊ばせた後れ毛が首筋をくすぐるのがむずがゆい。緩く頭を振つて、アンジェリカはため息をついた。

どう見ても、ドレスにも装身具にも負けている。もう少し、美しい容姿をしていたら、堂々としていられたかもしれなけれど——

「どうしたの？」

「あ、いえ……申し訳ございません」

ほんやりとそんなことを考えていたアンジェリカは、かけられた声にはつとして意識を青年に戻す。青い瞳を瞬かせ、躊躇いがちに手を伸ばすと、白い手袋がそれを受け止めた。

うやうやしく持ち上げられた手の甲に口づけが落ちる。それに動搖する間もなく、相手は追撃をかけてきた。

やんわりと、それでいて逃がさないと言わんばかりに引き寄せられ、抱き締められた

「いえ——あ、ええ、そうですね……」

隠しても仕方がない。アンジェリカは、そつと息をつく。

緊張しないわけがない、と思う。これから目の前の青年——ロイシユタ王国第一王子にして王太子であるエグバートの婚約者としてお披露目されるのだ。

それを意識した途端、心臓がどくどくと早鐘を打つ。震える指先を、エグバートが優しく包んだ。そして柔らかな微笑みを浮かべ、蕩けるような目つきでアンジェリカの顔を覗き込む。

それがあまりにも自然に行われるものだから、心臓に悪い。

「大丈夫だよ、かわいいアンジェリカ——何も心配はいらない、僕に全て任せて」

優しい声が耳に届く。頬を撫でられ、熱っぽいまなざしを向けられて、アンジェリカの鼓動はさらに跳ねあがつた。

氷の王子さま、と呼ばれていたエグバートのこんな姿を、誰が想像するだろうか。よく似た他人だと思うかもしれない。高鳴る胸を押さえながら、そんな馬鹿げたことを考えてしまう。それは現実逃避だったかもしれない。

(まるで、物語の登場人物にでもなったような気分)

近頃はや流行りだという物語を思い出して、アンジェリカはくすりと笑う。すると、エグバートが蕩けるように笑つた。

この調子なら、周りの人々には、エグバートが婚約者に夢中になっているように見えるだろう。

(全く、演技がお上手で)

アンジェリカの中の、どこか冷静な部分がそう考えた。

——そう、演技だ。

この婚約も、結婚も、全て契約の上でのことなのだから。

早鐘を打つ心臓を抑えて、アンジェリカは息を吸い込んだ。どうにか自然に見えるよう微笑みを浮かべると、今度はエグバートがくすりと笑う。

——さあ、一世一代の大舞台だ。

目の前の扉を見つめて、アンジェリカは大きく深呼吸した。

のだ。うろたえたアンジェリカの耳に、囁くような声が吹き込まれた。^{ささやか}



アンジェリカ・ヴァーノンは伯爵令嬢である。

ヴァーノン伯爵家は、歴史ある家柄だ。しかし、当代のヴァーノン伯爵は宮廷勤めをしているものの、とりたてて要職に就いているわけでもなく、領地が豊かなわけでもない。いわゆる普通の一言つてしまえば、中の上程度の貴族だ。

ただ、父である伯爵は堅実な領地運営と飾らない人柄で知られ、領民の信頼は厚い。アンジェリカには兄が一人おり、長兄は王宮に詰めることの多い父に代わり領地を管理している。最近結婚したばかりの妻と二人、遠方のヴァーノン領にある邸が生活拠点だ。

次兄は騎士として王宮に勤めている。なんでも、第一王子と年齢が同じとかで重用され、近衛隊に所属しているという。家に帰ることが少なく、アンジェリカは兄妹だというのに兄の仕事について詳しいことを知らない。時たま差し入れに行くこともあるが、それくらいだ。

寒さの抜け切らない春の日、その次兄——デイヴィットが唐突にとんでもない爆弾を

投下した。

珍しく家に戻った兄は、アンジェリカの部屋を訪れると、突然こう話し始めたのだ。

「アンジェリカ、おまえ確か十八になるよな」

「ええ……それがどうかした？　まさか、縁遠い妹を憐れんでどなたか紹介してくださるの？」

「そういう——うーん、まあ、そうなるのかなあ……」

デイヴィットがうーん、とか、ええと、とか、唸り声をあげ始めたので、アンジェリカは訝しむ。冗談のつもりだったのに、次兄の目は真剣だ。

どうしたのだろうか。頬をくすぐる赤毛を払つて、アンジェリカは考えた。

十六で社交界入りをし、十八ともなれば婚約者の一人や二人——いや、二人いてはおかしいか。とにかく婚約者がいるのが貴族令嬢としては普通である。が、残念なことにアンジェリカはその普通に当てはまらない。

彼女自身に、問題があるわけではない。実際のところ、婚約者はいたのだ。同じ伯爵家の嫡男で、父と同じく王宮で文官勤めをしていた二歳年上の青年である。しかし彼は、アンジェリカが社交界入りする直前、事故でこの世を去ってしまった。

この場合、次の後継者に婚約者がスライドする、というのが通例である。彼の場合、

弟がいた。ただ、その弟が問題だった。当時十五歳だったアンジェリカに対し、婚約者の弟は五歳。さすがに十も年の離れた夫との結婚を待つというわけにもいかず、アンジェリカの婚約は白紙状態となつた。

父はアンジェリカに良い嫁ぎ先を、と探してくれたが、そうそう見つかるものではない。アンジェリカ自身、何となく気乗りしないまま時は過ぎ、気付けば二年の時が流れていた。

そんな事情を思い出しつつ、兄へと意識を戻す。すると、視線を逸らし、アンジェリカと同じ赤い髪をかき混ぜながら、デイヴィットがため息をついた。できれば言いたくない、というのが透けて見え、アンジェリカは首を傾げる。

デイヴィットの紹介ならば、おそらく相手は騎士だろう。近衛隊なら、出身はほとんどが貴族だ。一代限りとはいえ騎士爵の地位だつてある。

嫁き遅れ目前のアンジェリカにとつて、ありがたい話だ。——まあ、父が何というかは知らないが、彼女と年も家柄も釣り合いが取れて婚約者のいない好青年など都合よく存在しないのだから、そろそろ現実を見てほしい。

「こんなこと、俺の口から言うのはどうかと思うんだけど」

デイヴィットが重い口を開く。どうやら話す気になつたらしい。

「——結婚、してほしいんだ。その……エグバート殿下と」

兄の口から飛び出したのは、予想もしなかつた名前で、アンジェリカは目を瞬かせた。

「……冗談、よね？」

「俺も、冗談だと思いたい」

デイヴィットがため息をつく。

「まあ、詳しい話は殿下が直接なさるそうだ。というわけで、王宮におまえを連れてこいと仰せでな」

苦い顔でもう一度ため息をつく兄を見つめて、アンジェリカは引きつった笑みを浮かべた。

「やあ、よく来ててくれたね」

「……お呼びに従い参上いたしました」

薄紅色の薔薇が満開を迎えた王家専用の庭に、エグバートはアンジェリカを呼び出した。ここであれば、人の目を気にしないでいい——ということなのだろうが、そんなことを気にするぐらいなら最初から呼ばないでほしい。

そんなアンジェリカの心情などどこ吹く風、といった調子で、エグバートはアンジェ

リカの背後に目を向ける。

「ああ、ディヴィット。おまえは下がっていていいよ。アンジェリカ嬢と一人だけで話をさせてほしい」

「はつ……し、しかし……」

妹を気遣ったのか、エグバートを気遣ったのかは分らないが、ディヴィットが難色を示す。しかし、エグバートの強い視線を受けてしぶしぶ頷いた。

「では——あちらで待機しております」

姿は窺えるが、話の内容は聞こえない。そんな絶妙な位置を指し示す。エグバートが頷いたのを見て、ディヴィットはちらりと妹に目をやると下がつていった。

「さて、ディヴィットから話は聞いているでしよう?」

「……あの、頗珍漢な話でしようか」

「そう、その頗珍漢な話だ」

アンジェリカ渾身の嫌味を軽く受け流して、エグバートは続けた。

「アンジェリカ嬢。悪い話ではないと思うのだけど? きみは不幸にも婚約者を亡くし、適齢期を迎えた今も嫁ぎ先は決まっていない」

「……まあ、他人から言わると腹が立ちますが、その通りです」

「そして僕も、そろそろ結婚相手を決めろとせつつかれている」
そこで、エグバートは表情を曇らせた。翠玉の瞳が憂いに翳る。アンジェリカは小首を傾げた。

「もうじきまた社交の季節を迎えます。伝統にのつとつて、仮面舞踏会でお相手を——

「それだよ!」

エグバートが頭かぶりを振った。

「あの馬鹿げた伝統のせいで、仮面舞踏会ではあちこちの令嬢から追いかけまわされる」

そう口にしたエグバートの瞳は、冷めきっていた。なるほど、仮面舞踏会で未来の王子妃を決めるという非効率的だがロマンがあるともいえるこの国の伝統を一蹴するとは、氷の王子さまと言われるのも頷ける。

エグバートに関する噂話を思い出して、アンジェリカは得心した。難攻不落の氷の王子——というのが、世間の令嬢方のエグバートに対する評価なのだ。

「今年こそ決める、と父上からも言われていてね……でも、あんな舞踏会で相手の何が分かると思う? たつた一言二言話ををして、それでダンスをして? そんなことで生涯添い遂げる相手を見つけるだなんて……馬鹿げていると思うでしょう?」

エグバートが、アンジェリカの手を取った。そうして、じりじりとにじり寄つてくる。

「そこで、きみのことを思い出した。うん、きみは僕を追いかけまわしたりしないし、変な小細工を弄^{ろう}したりもしない。それどころか、ほら、僕から逃げようとする^よとしている」先程からじりじりと後退していることを気取られていたらしい。くすり、と笑われて、頬が赤くなる。

「うん、それでいい。だからこそ、きみと結婚したいと思つたんだよ」

「それでいい、とは——」

「まあ、よく考えてみて？ 僕は、これで結婚相手を探せとせつつかれることもなくなる、妙な令嬢と結婚せずに済む。きみは、嫁^嫁き遅れと陰口を叩^{たた}かれるのを回避して、最高の結婚相手を見つけられる。それに、伝統にだつてのつとつてている、と言える」

一呼吸おいて、エグバートははつきりと口にした。

「アンジェリカ嬢。僕と結婚してほしい」

アンジェリカはしばし考えた。確かに、お互いにとつて利益のある話はある。しかし、ここでアンジェリカの胸中をよぎつたのは、埒^{らち}もないことだった。

——殿下は私のことが好きだから結婚したいわけではない。

亡くなつた婚約者とのことは、家が決めたもの。愛があつたわけではない。婚約が決まつたと、父から告げられただけであつた。

つまり——初めて受けた求婚が、利益だけを求めるものだということが、少しだけ切なかつた。それだけだ。

アンジェリカは、目を閉じた。愛のない結婚など、普通のことだ。しかし、なぜ自分を選んだのだろう。その答えを見出そうと、考える。

現在、エグバートの結婚相手として取り沙汰^{さた}されているのは、エイベル公爵家のクレア嬢だつたはずだ。彼女も熱心にエグバートに言い寄つているようだし、家格も申し分ない。

だが、こんな提案をしてくるからには、クレア嬢を王太子妃に据えるつもりはないのだろう。

エイベル公爵は随分な野心家だと、父が何かの拍子に言つていた。そのあたりに理由があるのかもしれない。

対して、自分はと言えば、まあ何の取り柄もない伯爵家の娘だ。父はとりたてて野心家ではないし、大それたことを考えそつな身内もない。

そこまで考えて、アンジェリカは苦笑した。

なるほど、令嬢たちが諦めるまでの短期間婚姻^{こんいん}を結ぶための、扱いやすい駒、ということか。

（まあ、いいか……）

婚約者が亡くなつて二年。自分から相手を探す気にもなれず、嫁ぎ遅れ目前の身である。だったら、理由は何であれ望んでくれる相手に嫁ぐのも悪くない。

それに、とアンジェリカはちらりとエグバートの顔を見た。何があつたとしても、彼は不誠実なことはしないだろう。家族には隠し事が苦手な兄が、今回の縁談に際して王太子本人への不平不満を一切口にしなかつたのだから、間違いない。自分はエグバートの笑顔の裏を読み解けないが、さすがに近衛の騎士には多少なりとも本性が知っているはずだ。

そう結論付けて、アンジェリカは静かに口を開いた。

「……分かりました。その話、お受けいたします」

「本当に？」

「ただし——」

そこで一旦言葉を切つて、正面からエグバートを見つめる。

「事前に、いくつかお約束していただきたいのです」

アンジェリカの言葉に、エグバートは一瞬目を丸くした。次いで、破顔する。アンジェリカの胸が一瞬どきりと音を立てた。

「いいよ、なんでも言うといい——なんなら、契約書を作ろうか」

そう言うと、手を上げて侍従を呼ぶ。紙とペンを持つてくるよう命じると、エグバートはアンジェリカの額に口づけた。そうして、アンジェリカの真っ赤な顔を見つめ、蕩けるような笑顔で言った。

「いいね、アンジェリカ。きみとあの舞踏会で出会えたのは、僕だった」

家に帰つたアンジェリカは、寝台に腰かけて今日のことを思い返していた。

契約に際して、アンジェリカが出した条件は、常識的なものだつたと思う。

ヴァーノン家に過大な肩入れをしないこと、それに加え、契約中の費用はエグバートの個人資産を用いること。

ひとつめの条件は、家に迷惑をかけないためのものだ。安易に昇進や陞爵などすれば、妬み嫉みの対象になつてしまふ。アンジェリカが決めたことで父や兄たちを困らせたくない。費用のことは、おまけみたいなものだ。

そして、公式の場では仲睦まじい夫婦として振る舞うこと。

いきなり不仲説が流れては、契約した意味がない。私的なところではともかく、公の場では仲睦まじいところを見せた方が、お互いのためだろう。

父親は、どうやらここで良い縁を見つけてほしいと思っているようである。しかしながらアンジェリカはさっぱり気乗りがしない。亡くなつた婚約者とは、家同士のつながりを求めていたのであって、特に恋とか愛とかそういうものがあつたわけではなかつた。それでも、それなりに親しくしていた相手がいなくなつたのだ。早々に「はい次」という気になれるものでもない。

挨拶回りに出た父には悪いが、もう少ししたら家に帰つてしまおう。近場にいた王宮

アンジェリカはさっぱり気乗りがしない。亡くなつた婚約者とは、家同士のつながりを求めていたのであって、特に恋とか愛とかそういうものがあつたわけではなかつた。それでも、それなりに親しくしていた相手がいなくなつたのだ。早々に「はい次」という気になれるものでもない。

父親は、どうやらここで良い縁を見つけてほしいと思っているようである。しかしながらアンジェリカはさっぱり気乗りがしない。亡くなつた婚約者とは、家同士のつながりを求めていたのであって、特に恋とか愛とかそういうものがあつたわけではなかつた。それでも、それなりに親しくしていた相手がいなくなつたのだ。早々に「はい次」という気になれるものでもない。

王宮主催の舞踏会だけあつて、ホールには大勢の貴族たちの姿がある。誰もが趣向を凝らした仮面をかぶり、笑いざざめく姿は、普段とは違う高揚感に満ちていた。

アンジェリカは、父であるヴァーノン伯爵に伴われ、その場にいた。彼がアンジェリ

カをここに連れてきたのは、王太子を狙つてのことではない。それはさすがに高望みがすぎる。

アンジェリカは、ふう、とため息をついた。婚約者を事故で亡くしてから一年が過ぎ

ている。喪に服していた彼女も、これ以上社交界デビューを先送りするわけにいかなかつた。

父親は、どうやらここで良い縁を見つけてほしいと思っているようである。しかしながらアンジェリカはさっぱり気乗りがしない。亡くなつた婚約者とは、家同士のつながりを求めていたのであって、特に恋とか愛とかそういうものがあつたわけではなかつた。それでも、それなりに親しくしていた相手がいなくなつたのだ。早々に「はい次」という気になれるものでもない。

その日、煌びやかなシャンデリアが下がる広いホールの一角で、アンジェリカは佇んでいた。――時は、一年ほど前に遡る。

初めて言葉を交わした日のことを思い出して、アンジェリカは、ほうとため息をついた。(さすがにそんなことはなさらない、と思うのだけれど)あの時は、こんなことが自分の身に起るなどとは思いもしなかつた。エグバートと初めて言葉を交わした日のことを思い出して、アンジェリカは、ほうとため息をついた。

さらに、契約解消にあたつては、事前に告知することをお願いした。既に自分の人生など半分くらいは諦めた気分のアンジェリカでも、突然離縁すると言われてうろたえる姿など見せたくない。

別に、何事が起きると思うほど自意識過剰ではない。だが、部屋に二人でいるところを見つかるだけでもまずい、ということくらいは分かっていた。

「いけません、殿下……！」

王宮の奥といえば、王族の住まいだ。青年が何者なのかを理解して、アンジェリカは蒼白になる。ここは、自分のような者が立ち入っていい場所ではないのだ。

重厚な扉が、音もなく開く。まばゆい灯りが灯された室内は、一目で分かるほど煌びやかな装飾に満ちていた。

「え、ここは……？」

の扉に手をかけた。

そのまま王宮の奥へ進んでいく。

必死に抵抗しようとするが、細身の割に青年の力は強い。アンジェリカの手を引いて、あたりはすっかり静まり返り、人気がない。薄暗い廊下の壁を、月の光が青白く照らしている。どんどん進み、やがてとある一角にたどり着くと、青年は迷うことなく正面

の足は止まらない。

「ま、待って……！」

しきりに背後を気にしていた青年は、アンジェリカのその行動に少し慌てたようだつた。そもそもそうだろう。色の濃い酒は、下手に擦れば染みが広がってしまう。やんわりと制されて、手を止める。

しかし、時既に遅し。白い上着にはしっかりと濃い紫の染みが広がってしまっている。

青ざめるアンジェリカを見て、青年は一瞬思案したようだつた。

「ちょっと来てくれ」

有無を言わざず手首を掴み、強引に連れ出す。宴のざわめきが次第に遠くなつても、

「さ、入つて」

「え、ここは……？」

「おつと……失礼」

その途中で急ぎ足の青年とぶつかってしまったのは、何もアンジェリカがぼんやりしていたせいだけではないだろう。後ろを必要以上に気にしながら歩いていた青年もまた、前方不注意ではあった。

ぶつかった拍子にグラスから零れた酒が、青年の胸元を濡らしている。アンジェリカは急いでハンカチを取り出して濡れた場所を拭こうとした。

「申し訳ございません……」

「ああ、いや、大丈夫だから」

その程度のことは、当然理解しているだろうに、青年——王太子、エグバートは素知らぬ顔で再度入室を命じる。

そうなれば、アンジェリカとて拒みようがない。身分からいっても——そして、物理的にも無理な話であった。なぜなら、アンジェリカの手首は未だエグバートが握つたままなのだから。

「着替えるから、そこで待つていってくれ——逃げるなよ？」

後ろ手に扉を閉めて、ようやくエグバートはアンジェリカの手を離した。もはや観念してこくりと頷くと、指示示された椅子に浅く腰かける。

すぐ逃げ出そうと身構えているように見えたのだろう。そんなつもりではなかつたが、仮面を外したエグバートが意地の悪い笑い方をするので、むつとしてしまう。

「殿下は、女性と過ごされたことがおありにならない？」

その質問に、エグバートは首を傾げた。淡い金の髪が、部屋の灯りに透けてさらりと揺れる。そんな姿も絵になるものだ。代々の王族の中でも出色的の美男子と言われるのも頷ける。

こんな時でなかつたら、素直に称賛できるのに。アンジェリカは、内心そう思つたが

顔には出さない。

「この、夜会用のドレスというのはやつかいな作りをしておりまして。こういう姿勢でしか座れないのです」

「なるほど」

得心がいった、とばかりに頷いて、エグバートはもう一度笑つた。しかし、その笑みには先程の意地の悪さはない。うんうん、と呟きながら衣装部屋へ消える。

正直、逃げ出せるものなら逃げたい。しかし、約束してしまつたからには逃げ出すのも業腹だ。それに、うつかり外に出ていく場面を第三者に見られたら、面倒なことになつてしまつ。

どうやら、自分はとことんツイていない人間らしい。はあ、とため息をついて、アンジェリカは部屋の中を見回した。

ぱつと見には、豪華絢爛に思えたが、よく見ると案外実用性を重視した部屋だ。ひとつひとつ家具は使い込まれている。

「へえ……」

えば、ラフな普段着に着替えていた。

「僕よりも、部屋の方が気になるか」

「い、いえ……失礼いたしました」

かしこまって答えると、また笑い声が起きた。よく笑うお方だ、と半ば呆れる。エグ

パートは隣の椅子に腰を下ろすと肩をすくめた。

「実を言うと、抜け出す口実を探していたんだ。助かったよ」

アンジェリカは逆に迷惑なのだが、王太子がそう言うなら領くしかない。できればとつととこの部屋から退出し、何事もなかつたような顔で父に帰宅の旨を伝えたい。

しかし、エグパートはまだアンジェリカを帰すつもりはないようだった。見る者的心を蕩かす笑みを浮かべ、おもむろに立ち上がる。

「何か飲む？」

壁際に設えられた棚から瓶を取り出すと、エグパートは振り返つてそれを掲げてみせた。緊張のせいか、喉が渴いていたことに気が付いて、中身が何なのか確認しないうちにアンジェリカは「いただきます」と口にする。

——それを後悔したのは、翌朝になつてからだ。

小鳥のさえずりに目を覚ませば、そこは見覚えのない部屋だった。頭が割れるようにな

痛くて、呻き声をあげる。

枕元の水差しに気が付いて、震える手で水を飲むと、やつと人心地つく。改めて部屋の中を見回しているところに、コンコンとノックの音、続いて若い女性の声が聞こえた。

「お目覚めでしようか……」

びくり、とアンジェリカの肩が跳ねる。慌てて着衣を確認すると、いつの間にかきちんと寝間着を着せられていた。特に乱れた様子はなく、おかしなところはないようだ。思ふところしているうちに、もう一度部屋の扉をノックする音がし、ほどなくがちやりとノブを下げる音がした。返答がないため、様子を見ようと先程の声の主が入室したのだろう。

「あ……」

お仕着せを身につけた侍女と思しきその女性と目が合う。アンジェリカは一瞬身体をこわばらせたが、彼女は柔らかな微笑みを浮かべた。

「起きていらしたのですね。お嬢さま、お身体の方はもう……？」

「あ、え、ええ……あの、わたくし……？」

「昨日は驚きましたわ。殿下に呼ばれて参りましたら……なんでも、舞踏会で具合が悪

くなられたとか？ 部屋を用意するようとの仰せで」

朗らかな声が、事情を説明してくれる。どうやら、殿下の部屋でいたい飲み物がよくなかったようだ、とアンジェリカは遅ればせながら気が付いた。おそらく、酒精の強い飲み物であったのだろう。酩酊したところを介抱されたらしい。

「あ、ありがとうございます」

「いえ、お礼でしたら殿下に……と申し上げたいところなのですが、殿下は既に公務に

出られておいでで」

シャツ、とカーテンを開ける音がして、部屋の中が明るくなる。

「起きたら、ご自宅へお送りするようにとのことでした。ええ、もちろんきちんとご家族には説明させていただきます。ご安心くださいね」

そう言うと、侍女が胸をどんと叩く仕草をする。それがおかしくて、アンジェリカは思わず笑ってしまった。

——あの後は、大変だった。

アンジェリカは、あの日のことを思い出してくすりと笑う。夜のうちに連絡が行つていたとはい、父は青くなつたり赤くなつたりしていたし、兄は呆れた顔をしていたも

メッセージを持たせてくれていた。それで、ようやく納得してもらえたのだ。
あれを二人の馴れ初めとするのならば、確かにエグバートの言う通り、伝統にのつとつたことになる。

(それにしても、殿下に求婚されるなんて、これから大変ね……)

寝台から窓の外を見上げて、アンジェリカはため息を漏らす。

「私、うまくやれるのかしら……」

父には、エグバートとデイヴィットが話をしてくれることになつていて。それから巻き起こるだらう騒ぎを予想して、アンジェリカはもう一度大きなため息をついた。

エグバートと契約を交わして二か月ほど過ぎた頃、ロイシュタ王国は社交シーズンを迎えた。その間、何度も兄への差し入れを口実に王宮に行つたり、反対にエグバートがヴァーノン家をお忍び訪問したりもしたが、公式の場で彼と会うのはあれ以来初めてとなる。

社交シーズン最初の舞踏会は、王宮で開催されるのが通例だ。デビューを迎えた貴族

の子女のお披露目^{ひろめ}のためである。

広いホールにはシャンデリアが煌めき、既に集まつた人々のさざめく声が、奏でられる調べに乗つてゆらゆらとたゆたつていて。

国王への拝謁^{はいえつ}を済ませたデビュタントたちは、ホールで初めての舞踏会に頬を紅潮させてあたりを見回していた。

その会場に、エグバートのエスコートを受けて、アンジェエリカが姿を現す。

すると、途端にざわめきが大きくなつた。

それもそうだろう。氷の王子と呼ばれる王太子が、蕩けるような笑みを浮かべているのも初めてなら、女性をエスコートしている姿を見せるのも初めてなのだ。緊張に震える指先をぎゅっと握り締めて、アンジェエリカはどのようにか正面を向いた。

ざわめきは二人の周囲を取り囲むばかりで、二人に直接声をかける者はいない。それだけがアンジェエリカにとつては救いだ。王太子の婚約者として、みつともない姿を晒すことは避けたい。

このまま時が過ぎてほしい。毅然^{ききやん}とした姿を保とうと背筋を伸ばすアンジェエリカを見て、エグバートがかすかに笑つた。

「かわいいアンジェエリカ、そんなに固くならないで。ほら、もうじき音楽が始まる。一

曲どうかな？」

「ええ、喜んで」

顔が近い。頬を染めたアンジェエリカと、それを愛おしそうに見つめるエグバートの姿に、周囲からはため息が漏れた。それは、羨望か嫉妬か——はたまた別の感情か。

二人がホールの中央へゆつくりと進む。それを合図にしたかのよう、デビュタントたちもそれぞれの相手と顔を見合させ、進み出る。

やがて、姿を現した国王の手が上がると、楽団は最初の一曲を奏で始めた。

「かわいいアンジェエリカ、きみはダンスの名手だね」「殿下ほどでは」

初めて二人で踊るというのに、ぴたりと息が合う。軽やかにステップを踏み、くるりとターンを決めた。エグバートの安定したリードのおかげもあって、アンジェエリカはダンスに没頭する。こんなに軽やかに踊れたのは初めてだ。自然と笑みが零れて、緊張が薄れてゆく。

やがて曲が終わりを迎える。一曲で終えるのは惜しいが、いつまでも踊つてているわけにもいかない。視線を上げ、最後の礼をとろうとするとき、微笑むエグバートと目が合つた。それは、今までの意地悪な笑みとも、蕩けるような笑みとも違う——アンジェエリカ

が見たことのない、自然な微笑みだ。

アンジェリカの胸が、どくんと音を立てる。握られた手が、そこだけ熱い。

「殿下……」

「名残惜しいけど、そろそろ行こうか」

一瞬でその微笑みをひっこめて、作り物めいた笑顔を貼り付けたエグバートがアンジェリカを促した。少しだけ残念に思つたものの、そのままダンスの輪から抜け出す。

「さて、本日のメインイベントといこう、かわいいアンジェリカ」

耳元で囁かれて、アンジェリカはぐくりと唾を呑み込んだ。今日は舞踏会を楽しむために来たわけではないことを思い出したのだ。大丈夫、と言ふようにエグバートがアンジェリカの腰を引き寄せる。

「それにしても、何なんですか？」

「何が？」

「その、かわいい——つてやつですよ。やりすぎじゃないですか？」

「いやだな、本当のことを言つているだけだよ」

小声で交わすやりとりの最後に、唇が頬を掠める。ひや、と声をあげそうになつて、ぎりぎりのところで踏みとどまつた。頬が熱くてたまらない。

そんなこと、本当は思つてもいないくせによく言うものだ。自分の顔の造りくらい、自分が一番知つてゐる。可もなく不可もない、十人並みというやつだ。アンジェリカはため息をついてから、エグバートを睨みつけた。

「そんな顔しても、かわいいだけだよアンジェリカ」

くすくす笑うエグバートに連れられて、アンジェリカはとうとうその日一番の大舞台に立つた。緩い螺旋を描く階段を数歩、導かれるようにしてあがつてゆく。到着すると、一礼して、エグバートが言葉を発した。

「父上」

「おお、そちらが……？ ああ、ヴァーノン伯爵の……」

「ご存知でしたか。ええ、ヴァーノン伯爵の息女で、アンジェリカ嬢です」

紹介されて、アンジェリカは礼をとつた。

「ただいまご紹介いただきました、アンジェリカでござります」

「よい、顔を上げよ」

国王の許しを得て、緩やかに顔を上げる。にこやかに微笑む壯年の王は、なるほどエグバートに面差しが似ていた。いや、逆か——エグバートが王に似ているのだ。すると、何年後かにはエグバートもこういう顔になるのだろうか。ちらりと浮かんだ

考えに、アンジェリカは内心で苦笑した。

その頃、自分たちはどうなつてているのだろう。この顔になつたエグバートを、近くで見ることがあるのだろうか。

浮かんだ考えを、慌てて追い出す。少なくともそれは今考えることではなかつた。

「アンジェリカ嬢とは、去年の仮面舞踏会で出会いまして」

「ほう、そんな話は聞いていなかつたがな」

王妃は、黙つてその様子を眺めている。

エグバートはあまり、王妃には似ていなかつたがな、とアンジェリカは思つた。

「ええ、残念ながらその場では振られてしまつた。その後も、こつそりと彼女に求

愛し続けていたのです」

「でつ……殿下……！」

作り話にも程がある。慌てたアンジェリカがエグバートの言葉を止めようとするが、

国王はそれを聞いてからからと笑つた。

「そうかそうか、なるほどな」

「ようやく受け入れてもらえて、私は天にも昇る心地でした」

「はは、それほどにか」

「ええ、私は今、この方に夢中なんです」

「まあ……お熱いこと」

それまで黙つていた王妃が、ころころと笑う。その表情を見て、アンジェリカは先程の感想を改めた。なるほど親子だ。この表情、エグバートによく似ている。——いや、

ともう一度考え直す。王と同じだ。エグバートが王妃に似ているのだ。

「——エグバート、ヴァーノン伯爵には？」

「無論、お話ししてあります」

「うむ……皆の者！」

腰に回された腕の温かさに、ほつと息が漏れた。ここで無様な姿を晒すわけにはいかない。よろけそうな足に力を入れて、エグバートの顔を見る。

「この場を借りて、皆に喜ばしい発表がある」

歩前に踏み出す。今度は集中する視線にひるむことなく、しっかりと前を向いた。

隣に立つエグバートがそれを見て頷くと、ゆっくりと口を開いた。

「聞いてくれ。私、エグバートはヴァーノン伯爵のご息女アンジェリカと婚約をした。皆、祝つてほしい」

わつ、と歎声があがる。その場にいる全員にグラスが配られると、それぞれ思い思いで掲げ音を立てて合わせる。アンジェリカも、エグバートとグラスを合わせ微笑みを交わした。

その様子は、どこからどう見ても相愛の恋人同士だ。少なくとも、エグバートの演技は完璧だった。見破られるとしたらきっと自分の方だろう。

おかしくなつて、ついくすくすと笑いだす。そんなアンジェリカを見て目を細めたエグバートが、耳元に口を寄せた。

「これでもう逃げられないよ、かわいいアンジェリカ」

「あら、逃がしてくださいさる気があつたんですか？」

アンジェリカの言葉に、一瞬目を見開いて、エグバートが笑う。とても自然なその笑顔は、噂の「氷の王子」らしさは微塵もなかつた。

第一話 初夜とはどんなものかしら

時の経つのは早いもので、あの婚約披露からたつた三ヶ月でこの日——結婚式を迎ってしまった。通常であれば、婚約期間を一年は設けるところだが、これまで女性に見向きもしなかつたエグバートが結婚すると言い出したのである。気が変わらぬうちに、と国王直々の命令により超スピードで結婚式の準備が進んだのだ。

王宮の一角に準備された花嫁の控え室で、アンジェリカは花嫁衣装に身を包んでいる。王族にのみ使用することを認められる意匠を盛り込んだドレスは、ため息が出るほど——重い。この上に、バルコニーでのお披露目にはマントを羽織るのだと言うが、それがまた重い。手に持つのだと示された錫杖も重たいし、何より頭に着けるティアラも重い。

素晴らしい衣装には違いないのだが、こんなに重くては移動するのも一苦労だ。これを着て、大聖堂の長い絨毯の上を歩くのかと思うと、それだけでため息が出る。ふう、と息を吐いたアンジェリカを見て、侍女たちがくすくすと笑つた。

「アンジェリカさま、今からそのように緊張なさつては……今日は先が長いのですから」そう声をかけるのは、あの日アンジェリカを介抱してくれた侍女だ。名をブリジットという。落ち着いて見えるが、年齢はアンジェリカと変わらないというから驚いた。そのブリジットに向かって、アンジェリカは曖昧に笑う。緊張からではなく、ドレスが重いのが憂鬱で、と言つたら彼女はどんな顔をするだろう。羨望のまなざしでアンジェリカを——いや、ドレスを眺めている彼女の夢を壊すのはしのびない。まして、エグバートとアンジェリカの間に恋とか愛とか、そういうのが欠片もないことを知つたら。

——いまや、エグバートとアンジェリカの恋物語は、王都中の乙女たちの憧れなのだとブリジットは興奮気味に語つていた。あの伝統の仮面舞踏会で出会い、恋に落ちた二人。伯爵令嬢であるアンジェリカは、身分を気にして身を引こうとする。しかし、諦めきれないエグバートは、毎夜部屋を訪ねては愛を囁く……

それを聞かされて、笑わなかつた努力だけは褒めてほしいものだ。

「……そうね、今日は一日よろしくね」

「おまかせください！」

ブリジットがどんと胸を叩いて請け合つた。そのかわいらしい姿に、口元がほころぶ。

この場にいるブリジットより年かさの侍女たちも、その姿をにこやかに見守つていい職場だな、と素直に思う。

そこへ、部屋の扉をノックする音が響いた。はい、と答えたのは扉近くにいた侍女だ。名前は確か、ベリンダと言つたはずである。

そのベリンダが、扉の向こうの声と一言三言交わす。振り向くと、扉を開けて兄が入ってきた。次兄のディヴィットである。

「へえ、馬子にも衣装とはよく言つたもんだ」

「喧嘩を売りに来たの？ お兄さま」

唇を尖らせたアンジェリカの頭を、ディヴィットの大きな手が撫でた。幼少期には何度もされた仕草だが、大きくなつてからはない。意外にも優しい手つきでそれを行ふと、ディヴィットは目線で侍女に退出を促した。

一礼して、侍女たちが部屋を出る。おそらく侍女たちは、嫁ぐ前の最後の兄妹の時間などと考えていると思うが、ディヴィットとはこれからも顔を合わせる機会がいくつもある。何といっても、アンジェリカの夫となるエグバートの近衛騎士なのだから。

「……お兄さま？」

「アンジェリカ。俺がこんなことを言えた義理じゃないが……殿下のこと、よろしく頼む」

その言葉に、アンジェリカは目を丸くした。普通、兄がそれを言う相手は自分ではなくエグバートではなかろうか。そう思いながらも、兄の青い瞳が——アンジェリカと同じ色をしたそれが、妙に真剣だったから、戸惑いながらも頷く。

「頼んだぞ。何があつても、殿下を信じてお傍にいて差し上げてくれ」

「——はい」

その返答を聞いて、デイヴィットがほつとした表情になる。もう一度、アンジェリカの頭をぽんぽんと叩く。

「こうするのも、最後かな」

「そう、ですね」

しばし、部屋の中に沈黙が落ちた。少しだけ、しんみりとした空気が流れる。それを断ち切るかのように、デイヴィットが笑顔を作った。

「そうだ、これを一番に言わなきやいけなかつたな——おめでとう、アンジェリカ。幸せになるんだぞ」

「ありがとうございます……」

既に邸を出る時に、父母と、参列するために王都へ来てくれた長兄夫婦と同じやりとりを交わしてきた。が、それでもアンジェリカの目にじわりと涙が滲む。

「ば、ばか……化粧が崩れるぞ」

「どうせ、塗つても塗らなくとも変わりません」

憎まれ口を叩くアンジェリカを、困ったように見つめて兄は微笑んだ。

「ばーか。今日のおまえは——その、綺麗だよ」

「ぽん、と大きな掌あひらがもう一度アンジェリカの頭に置かれる。必死に涙を堪こらえて、アンジェリカは笑つてみせた。

大聖堂に、厳かな鐘の音が響く。白を基調とし、所々に金の装飾を凝こねらした大聖堂は、王宮の敷地内にあって唯一市民の立ち入りが許された場所である。

しかし、王族の——しかも、王太子の結婚式が行われる今日、さすがに市民の立ち入りは制限され、中を埋めるのは王太子の結婚に立ち会う榮誉じゆを与えられた一部の貴族たちだけだ。

両側に居並ぶ貴族たちの間を、アンジェリカは父に腕を取られてゆつくりと歩く。中央では、夫となるエグバートがじっと待っている。悠然と立つその姿は、花嫁の対となるような意匠いわうを凝らした白い礼服。濃紺の礼服姿もきりりとしていたが、こちらの衣装もまたエグバートの美しさを引き立て、一点の曇りもない貴公子ぶりだ。

この方の隣に立つのか、といまさらながらアンジェリカは身震いした。結婚式の主役は花嫁だと言うが、今回に限つては新郎が主役だ。

「さあ、アンジェリカ」

父に促され、エグバートが差し出す手に、自分の手を重ねる。一度それをぎゅっと握つたエグバートが、微笑んでその手を腕へと誘導する。

「殿下——よろしくお願ひいたします」

「もちろんです」

花嫁の父と新郎とが、短い挨拶を交わした。ぽん、と背中を叩かれて一步前へ踏み出す。じわり、と胸が熱くなり、アンジェリカは振り返りたくなる衝動を必死に堪えた。

そのまま、ゆっくりと一步ずつ、神官長の待つ祭壇の前へ歩いていく。

「エグバート・ロイシユタ。誓いの言葉を」

「私、エグバート・ロイシユタは、生涯妻アンジェリカを愛し、いかなる苦難からも守り、また、全ての喜びを分かち合うことを誓います」

神官長に促され、エグバートが誓いの言葉を述べる。

「アンジェリカ・ヴァーノン。誓いの言葉を」

「私、アンジェリカ・ヴァーノンは、生涯夫エグバートを愛し、いかなる苦難からも援す

け、掛けた時は支え——また、全ての喜びを共にするなどを誓います」

「二人を、神の聖名の下、夫婦と認めます。それでは兩人、誓いの口づけを」

その言葉を合図に、互いに向き合う。翠玉の瞳が、アンジェリカを優しく見つめた。

どうしたことか、それだけで心臓が破裂しそうなほどに痛い。

頬に手を添えられて、ゆっくりと目を閉じる。唇にそっと触れる温かさを感じて、不意にアンジェリカは気が付いた。

——これは、自分たちが初めて交わす口づけだ。

エグバートは分からぬが、アンジェリカにとつてはまさに初めての口づけである。かあ、と頬に血が上つて、その顔を見られたくないくて俯こうとする。

その初々しさに、周囲からは微笑ましい視線が送られた。

こうして、二人は無事に夫婦となつたのである。

場所を移して行われた披露宴は、盛大なものだつた。バルコニーでのお披露目 이후、

重いドレスを引きずつて移動した先では、今度は大勢の賓客たちがかわるがわる挨拶に訪れる。それに笑顔で応えながら、アンジエリカは内心でため息をついた。

（ドレスが、重い……早く終わらないかしら……）

新郎新婦は、披露宴を中座するのがこの国の習わしである。それに従つて、エグバー

トはアンジエリカを抱え上げると微笑んで退室する旨を告げた。

その姿は、おおむね好意的な視線で見送られる。

「重いでしょう、エグバートさま……あ、歩けますから……」

かなりの量を飲んでいたように見えたのに、エグバートの足取りは全く危なげない。しかし、婚礼衣装のドレスがかなり重いことを身をもつて知っているアンジエリカは、

エグバートにそう声をかけた。

「婚礼の日は、新郎は寝室まで花嫁を運ぶものでしよう？」

「それは……でも、王宮は広いですから……」

披露宴を行つた広間から、エグバートの——これからは、アンジエリカも共に生活す

ることになる——部屋は遠い。三か月の間、王宮に通つて地理を頭に入れたアンジエリカは、途中で下ろしてもらおうともがいた。

「ほら、暴れない」

細身の身体のどこにこんな力があると言うのか、もがくアンジエリカを器用に押さえつけて、エグバートはどんどん進む。その表情は、楽しげですらあつた。

せめて自分にできることは落ちないようにつかり掴まることくらいだ。首に手を回し、ぎゅっとしがみつくると、彼の身体が見た目よりもつかりしているのがダイレクトに伝わってくる。

男兄弟しかいない家庭で育つたとはい、こんな風に密着する機会などないに等しい。初めて感じる男の身体の硬さ、その力強さに眩暈^{めまい}がしそうだ。

「さて、着いたよ」

部屋の前で控えていた騎士が、扉を開ける。今日の護衛が兄でなかつたことにアンジエリカは感謝した。こんな姿を見られるなんて、想像しただけでも恥ずかしきる。

室内に入り、煌々と^{あか}灯りがついた部屋をエグバートの足がつかつかと横切つていく。

二つめの扉が、侍女の手で開かれた。おめでとうございます、の声にエグバートが何か答えていた。しかし、既に恥ずかしさで飽和状態のアンジエリカの耳には何といったのかよく聞き取れなかつた。

その扉が静かに閉められて、途端に部屋の中が薄暗く感じる。寝室だ、と気が付いた時には、アンジエリカはそつと寝台に下ろされていた。その手つきが存外優しくて、胸

がざわつく。まるで、大切なものとして扱われているようでくすぐつた。

ただ、都合がいいから選ばれただけだと頭では分かっているのに——。アンジェリカの胸が、ちくんと痛みを覚えた。

こんな風にされたら、勘違いしてしまいそうになる。

——そんなことを考えていたせいだろうか、アンジェリカは自分の置かれた状況に気が付いていなかつた。

「湯浴みをする？……と聞きたいところだけど

エグバートの声がやけに近くで聞こえる。え、と思つた時には既に端整な顔が間近にあつた。アンジェリカに覆いかぶさつた彼が、ちゅ、と音を立てて唇を合わせる。

後ろ頭を探つていた指が、器用に動いて結い上げた赤い髪を解く。ぱらりと落ちたそれを、手櫛で梳いた。

そのまま抱え込まれて、口づけがだんだんと長くなつていく。息苦しくて開けた口の隙間から、ぬるりと何かが侵入した。

「え、あ……!?」

アンジェリカの困惑をよそに、エグバートの舌が口腔内を蹂躪する。唾液の混じり合うぐちゅぐちゅという音が聞こえて、アンジェリカは真っ赤になつた。

歯列をぐるりと舐められたかと思うと、舌の付け根をくすぐられる。唇を塞がれたアンジェリカは「ん、ん」と言葉にならない声を発した。どちらのものとも分からぬ唾液が喉を滑り落ち、呑み切れなかつた分をじゅつと吸い取られる。その行為だけで、頭がくらくらしてきた。じわじわと、身体の奥が熱くなる。

アンジェリカとて、夫婦が闇で何をするかくらいは母から教えていた。だから、この行為の先にあるのが子作りのためのものだと知識では知つてゐる。

だが、それが自分とエグバートとの間で行われることは想像していなかつた。仲睦まじい夫婦のふりをする以上、初夜も執り行つたふりをするだけだと思い込んでいたのだ。

「ま、まつ……」

「だめ、待てないよ……ほら、ちょっと腕を……」

少なくとも、こんな行為をしながら脱がせる伝統はないだろう。

そんなことを考へてゐる間に、持ち上げられた腕からドレスが引き抜かれる。性急に見えて、丁寧な所作に育ちの良さが窺えた。

ただ、それとは裏腹にエグバートの視線は熱い。煮えたぎるような欲を孕んだ翠の瞳がアンジェリカを捉えて離さない。掠れた声に、少し乱れた礼服。いつの間に取つたのが、白いタイが床に落ちている。その上に、アンジェリカの着ていたものがぱさりと落とされた。次いで、わざわざそうに脱ぎ捨てられたエグバートの白い礼服が重なる。肌着をめくりあげられて、白い胸が露わにされた。はあ、と熱い息を吐いたエグバートがじつとそこを見つめる。

「綺麗だね」

「な、何を——！」

ぱつりと落とされた言葉に、アンジェリカの顔が熱くなつた。この状況だけでも耐えがたいのに、そんな感想を言われるなど、頭がおかしくなりそうだ。思わず反論しようとした時、エグバートの指が膨らみを撫でた。つつ、と滑る指の感触が生々しい。

「は、柔らか……」

遠慮がちだった動きが次第に大胆になり、ついには掌で揉むようにして乳房の形を変えてゆく。持ち上げたり、揺らしてみたり、まるで好奇心を満たす子どもみたいに夢中だ。ひとしきり感触を楽しんだエグバートが、今度はその先端へと口を寄せる。

「は、あ、あっ……」

ぱくり、と食いつかれて、唇でむにむにと挟まれる。舌先が遠慮がちにつんつんと先端をつつく。その刺激に、アンジェリカはたまらず声をあげた。

その反応に、口角を上げたエグバートが、もつと大胆に先端を舐めあげ、時折吸い付いてくる。気付けば、反対側の先端は指先で摘まれ、くにくにと捏ねられていた。

「あ、ん……つ、あ、あ、いや、なんか、へん……」

「ん、かわいい……」

刺激されるたび、身体中がしびれてゆく。全ての感覚が、胸の先に集まつたかのように敏感になつて、与えられた刺激を余さず拾おうとする。

それだけではない。触れられてもいない、お胎の奥がうずうずと未知の感覚を伝えてくる。それをどうにかやり過ごしたくて、アンジェリカは身じろぎした。

「ふふ、かわいい……かわいいアンジェリカ、ほら、腰が揺れている。素直でいい身体だね

それに気付いたエグバートが、からかうように口にする。まるで、淫らな女だと言われたような気がして、アンジェリカは首を振つた。青い瞳に、じわりと涙が浮かぶ。

それをペロリと舐めて、エグバートが妖艶に笑つた。

「いいんだよ、アンジェリカ。もつともつと、乱れたきみが見たい」

そう告げた手が腰を撫でる。アンダースカートと、重ねられたパニエをするりと引き